

地域の伝統的な祭りにおける紙と絵具で作られた灯籠の制作・素材に関する造形的研究 その3

～新潟県村上市七夕まつりにおける七夕屋台の祭り灯籠“雪洞”

Study of a production process and materials of lanterns made of paper and paints in local traditional festivals Part 3

吉川 賢一郎
KIKKAWA Kenichiro

キーワード：地域、伝統的な祭り、灯籠の装飾、素材、制作方法、造形的視点
Keywords : regional activation, traditional festival, decorative lanterns, material, production method, modeling perspective

In this research we selected festivals which use traditional and characteristic festival lanterns in the areas along Japan Sea coast from Tohoku to Hokuriku regions, and conducted on-site surveys of the materials and production processes of the festival lanterns through the interviews with those involved in the production. The next on-site research report will deal with the Tanabata festival in Murakami city, Niigata prefecture.

Our main focus of this research report is the festival lanterns used in Tanabata floats at the Tanabata Festival in Murakami city, Niigata prefecture. We mainly report the result of questionnaires, conducted in 2014 on the site of the Murakami Festival and in the towns where the procession of the festival went around, about the tools and equipment used in the festival, and the field survey conducted in 2017 in the place of production interviewing people in charge of every town about the material and production process.

1. はじめに 1-1 調査の対象と目的

本研究では、地域の伝統的な祭りで使用され内部に照明を灯す灯籠の制作・保存・修復に活かすため、紙・絵具・骨組・光源といった素材に着目している。研究では地域の様々な要因から複合的に変化し、日本独自の伝統となっている祭り灯籠の独自性を確保しつつ、祭りの将来への継承と、地域活性化に貢献することを目的とする。今回の報告では、新潟県村上市の「七夕まつり」の七夕屋台における祭り灯籠に題材を絞り込み、平成26(2014)年に村上まつり及び七夕まつり^{注1}で巡行を行う町^{注2}を対象に実施した祭礼道具に関するアンケート結果の報告、平成29(2017)年に素材や制作について各町内の七夕まつり担当者に七夕屋台の制作現場で取材した現地調査報告を中心に行なう。

1-2 調査の内容

今回の報告では、研究対象を新潟県村上市の「七夕まつり」の七夕屋台における灯籠“雪洞”とした。

調査対象地域は、新潟県村上市の西奈彌羽黒神社例大祭である「村上まつり」巡行で使用する「おしゃぎり」と呼ばれる二層二輪の山車と、「七夕まつり」の巡行で使用する「七夕屋台」と呼ばれる一層二輪の山車をともに所有する19町とした。村上市全体では「村上まつり」「瀬波まつり」「岩船まつり」と呼ばれる3つの祭りが例大祭として行なわれ、地域の人々に親しまれ、祭りが生きる原動力になっていると言っても過言ではない。

平成26(2014)年に実施した「七夕まつり」についてのアンケートは、村上まつり保存会の協力で、保存会総会において保存会事務局の説明によりアンケート用紙を配布した。そして、総会終了後に保存会事務局が設置されている村上市郷土資料館(通称:おしゃぎり会館)で回収し、19町のうち10町から回答を得た。

また、平成29(2017)年4月に筆者が保存会総会で七夕屋台と雪洞の現地調査について趣旨説明を行い、協力を依頼した。現地調査は、19町のうち8町から回答と調査許可を得た。調査は対象地域において、アンケート調査とは別に、実際に七夕屋台の制作や修復を行っているまつり保存会、町内の青年会、祭り灯籠の制作を専門とする職人、行政の担当者などに取材を申込み、制作現場での聞き取り調査を行った。事前に情報を集めて現地の取材を行うものの、現地でなければ知ることのできない情報や資料の発見が多くあり、現地調査の重要性を痛感した。また、各地域の制作現場では、突然の調査取材の申込みにもかかわらず、祭り灯籠の制作、素材に関すること等、祭りの現状なども丁寧に説明して頂き、祭りに対する熱意や想いも知ることができた。今回の報告では、素材や制作方法、維持と展開に対する考え方等を中心に、制作現場の様子を交えて記載を進めていく。

2. 村上の七夕まつり 2-1 七夕まつりの歴史的背景

村上の七夕まつりの起こりは、いつの頃からか明らかではない^{参考1}。享保16(1731)年7月6日の『村上行事所日記』^{参考2}に「今夕町々より子供川原へ出てねふりながし

候、鳴物など或は相撲、踊り例年の如く騒々しき儀御停止の旨町中へ申し触れる」の記述があり、ねぶり流しがおどりなどの芸能を伴って盛んに行なわれた様子が伝わる。ねぶり流しは夏季の睡魔を払う眠流しの民俗に災厄を払う人形流しや精霊流しが習合したものと考えられている。

ねぶり流しに付きものの灯籠は、村上では七夕屋台と言いい、明治時代初期までは伊勢神宮の内宮を模した伊勢堂(館)の前後左右の四方に四人で担ぐ棒が延び、伊勢堂の中心部には柱を立て、5～6基程度の雪洞と言われる箱型の灯籠を通し、その上には花傘と御幣を付けたものを担いで持ち歩いたとされている^{参考1～2}。現在は、二輪の台車に伊勢堂を載せ、台車の先端に手木と呼ばれる太い木を取り付け、手木と綱で七夕屋台を曳き廻している。嘉永7(1854)年に佐賀藩士牟田文之助高惇によって書かれた『諸国廻歴日録』^{注3}には、その当時に描かれた七夕屋台の絵(図1)とともに「町々から高提灯を数多く太鼓を数多く付け太鼓を打ち、若者たちは浴衣姿で高張り、弓張り提灯は星のようだ。暮れ頃から飾り(七夕屋台)を持ち歩き夜中12時から2時頃まで賑わう」との記載^{注4}がある^{参考2、3、図1}。

2-2 村上の七夕屋台における雪洞の特徴

七夕屋台の灯籠である“雪洞”は台車に、下から伊勢堂、台雪洞、抱雪洞、長雪洞または扇雪洞、花傘、御幣の順で設置され、後方には見送り雪洞^{注5}が配されている。雪洞に描かれる題材は歌舞伎や軍記物が多く、背景画を施し押絵を付け、雪洞の箱型木枠内でその世界観を演出する。加賀町における3基の雪洞(抱雪洞、台雪洞、見送り雪洞)では題材を「鍋島化け猫騒動」^{注6}で統一しているが、各町の雪洞を見る限りでは、そのように全ての雪洞を同一題材で統一させるものは見受けられない。縦に積み重ねて装飾された3基の雪洞と花傘を囲むように紅白で飾られた棒には提灯が下げられ、四方には竹が飾られる。図1のように明治時代初期までは七夕屋台に6基の雪洞を載せて曳き廻していたが、現在の村上市に該当する村上町では、大正3(1914)年4月3日に村上水電株式会社の電気事業開始によって電線が敷設されたため、高さに物理的な制約が生じ、現在では正面の雪洞が3基、後方の見送り1基にまで減少している^{参考2}。明治時代初期の雪洞と現在のものを比較すると、現在では雪洞の数が減り、御幣を飾る町も減少している。また、花傘下の雪洞は、19町のうち14町が直方体の長雪洞であるのに対し、5町(久保多町、庄内町、片町、上片町、加賀町)が扇型をした扇雪洞となる^{写真1-6～7}。雪洞の枠の色は黒色の町が多いが、大工町や羽黒町のように塗装せず白木のままとしている七夕屋台もある。

3. 各町で行なわれる祭礼行事の道具に関するアンケート

概要: 村上市の各町で行なわれる祭礼行事で使用される祭礼道具に関するアンケートは、19町のうち10町(久保多町、大工町、上町、細工町、小国町、長井町、庄内町、加賀町、上片町、泉町)から回答を得た。

1年を通じて行なわれる各町内での祭りは、村上まつりと七夕まつりが主となっており、次いで地蔵様まつり、稲荷神社例大祭神楽(春・秋・初午)がそれぞれ半数の町で行なわれている。また、各町が公民館として使用している



写真1-1. 村上まつりで巡行される大町のおしやぎり



1-2



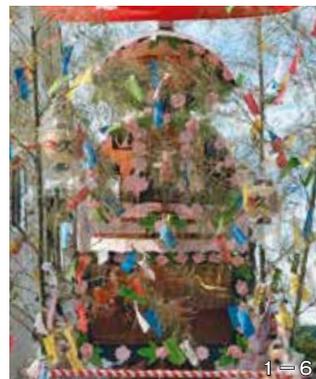
1-3



1-4



1-5



1-6



1-7



図1

写真1-2～3. 村上まつり保存会総会での筆者による説明

写真1-4～5. 七夕祭りの巡行と獅子舞の様子
写真1-6. 雪洞の比較: 扇雪洞(久保多町の七夕屋台)

写真1-7. 雪洞の比較: 長雪洞(長井町の七夕屋台)

図1. 牟田文之助高惇によって描かれたとされる絵

神社や寺院の祭礼行事を実施する町もあった。

保管場所：町で所有する倉庫、おしゃぎりや七夕屋台専用の収蔵庫^{註7}、町内にある神社や寺院の倉庫が挙げられる。

修理担当者：祭礼道具の修理は、10代から40代が担い、30代が最も多く関わっていることが判った。また、町によっては人手不足により、町内の各担当の全責任者が協力する、町内全体で協力出来る者が協力する、といった記述もあった。かつて村上まつりは男性が中心の参加であったが、近年では女性の参加も多く、まつりを運営する上で欠かせない人材となっている。

制作：各町で行なわれる祭礼行事で使用する祭礼道具を制作する際に心掛けていることは、伝統を守る、素材や色・形をできるだけ変えない、できるだけ古くからの道具と同じようなものを作る、毎年同じ道具を使用する、といった伝統を重んじるものが5町と比較的多いことが判った。加えて、伝統を守るだけでなく時代に合ったものを作るといった意見も1町あり、時代の変化や、ものの進化に対応する姿勢も見られた。また、丁寧なもの扱いを心掛ける、制作過程も祭礼の一部であり、心を込めて制作・修理を行なう、といった町もあり、予算や人手不足を理由に道具の破損を防ぐだけでなく、祭礼という意識が丁寧に祭礼道具を扱うことにつながっていることも判った。

道具の使用や保存の問題点：各祭礼行事で使用する道具は、破損しやすい、虫食いに悩まされる、雪洞に和紙を使用している関係で雨天も多い祭礼当日の雨対策に気を遣い曳き廻す、といった点が挙げられた。保存の問題点としては、現状の保存方法が文化財に指定された場合に対応出来るか不安、七夕屋台の収蔵庫の劣化が激しいが資金繰りの目処が立たない、収蔵場所が狭いため分散して収蔵している、解体せずに収蔵出来る空間があれば道具の破損が少なくて済む、収蔵庫内の湿度が高い、といったことが挙げられた。

装飾の素材：接着剤に9割の町が一般的なでんぷん糊を使用し、他に木工用ボンド、両面テープ、タッカーを併用する。絵具は水彩絵具を使用する回答が6町と多く、墨汁や溶剤系塗料、ポスカなどの顔料系ペンも使用している。紙は、和紙と障子紙と洋紙を使用するが、用途によって使い分ける町もあり、色のついた洋紙や水に強い和紙といった具体的な特性のある紙も挙げられた。こうした素材の調達には、古くからある各町内の商店や市内の商店からの継続した購入が多いが、商店の閉店による購入先の変更や入手困難な素材の購入は、通販を利用する町内もあった。

4. 各町における現地調査

概要：各町における七夕屋台の現地調査を行なうにあたり、村上まつり保存会に協力を仰ぎ、平成29(2017)年4月23日に行なわれたおしゃぎりを巡行する全19町の評議員が参加する村上まつり総会にて資料を配布し、取材協力を依頼した。その結果、8町(大町、大工町、小町、上町、鍛冶町、肴町、長井町、泉町 以上巡行順)からの調査許可を頂くことができた。総会の評議員には各町の区長が含まれ、以下、区長の人選によって調査対応担当者が決定された。

現地調査：7月6、7日の村上まつり、7月23日の地藏様まつりが終わり各町内で七夕まつりの準備と獅子舞の練

習が始まる7月24日、25日、8月1日に行なった。現地調査を行った場所は、七夕まつりの装飾準備や獅子舞の練習をする各町の集会場、神社や寺院である。これらの場所の規模は異なるものの、いずれも町民が集まる拠り所としても使用されている。調査での確認内容は、七夕屋台や雪洞などの装飾の保管場所、雪洞の制作で使用する紙や絵具、接着剤といった素材、制作上の注意点やこだわり、とした。



写真2-1. 平成29(2017)年の大町七夕屋台巡行の様子

写真2-2. 作業場となっている十輪寺

写真2-3~4. おしゃぎり収納庫と間魔堂

写真2-5~6. 屋台や雪洞の確認

写真2-7. 押絵の裏面

写真2-8. しるしの入った提灯

写真2-9. 写真中央に斜めに配置された「とんぼ」

4-1 おおまち じゅうりんじ 大町 十輪寺

大町の渡部不二人（54歳）さんと横澤信夫（48歳）さんに作業場となっている十輪寺で話を伺った。

著者の父親の実家がこの町内にあったため、学区の違う私は従兄弟たちと共に子どもの頃からこの大町のおしゃぎりや七夕屋台の曳き廻し、お囃子や獅子舞の練習に参加した。団塊ジュニア世代の私が子どもの頃は、子どもの数がどの町も多く、他町から参加することはまだ少なかったが、現在では大町にゆかりのある人達やその友人達といった他町に住む人達の参加が多く、祭りを盛り上げている。

現地調査を行なった当日は、雪洞や提灯などを倉庫から出す日であった。大町の場合、おしゃぎり収蔵庫と閻魔堂の倉庫を持つが、おしゃぎりはおしゃぎり会館に常設展示されているため、現在ではおしゃぎり収蔵庫に七夕屋台を保管している。町内の抛り所となっている十輪寺に雪洞等の装飾道具を運び、欄間に括り付けた紐に提灯を通して吊し、破損がないか修理箇所を確認する。雪洞の外側面は木枠に貼られた障子紙上にしるしや文字をカラープリンターで出力された紙を貼り、透明ビニールで覆い、画鋳で固定する。以前は押絵を借りていたとの証言もあり、私の子どもの頃となる昭和50（1975）年代中頃、雪洞に漫画『Dr.スランプ』のキャラクターが装飾されていたことを記憶している。現在使用している押絵は、昭和61（1986）年に市内庄内町の中村近惣氏^{注8}によって制作されたものである。

4-2 だいくまち 大工町集会所

大工町の高橋則敏（59歳）さんに大工町集会所の中で話を伺った。

元タニ寺であったこの集会場は、小規模ではあるが収納場所も確保され、今も美しい天井絵がはめ込まれた機能的で魅力的な建物であった。おしゃぎりを巡行する19町のうち最も世帯数と人口の少ない大工町^{注9}は、途絶えていた七夕まつりを昭和55（1980）年に復活させた。高橋さんが七夕まつりの現役引退を機に、誠松会^{せいしゅうかい}という大工町の七夕まつり応援組織を立ち上げ、以後まつりを盛り上げて来た。しかしながら、平成29（2017）年に参加者不足のため、町としての参加ができなくなった。なお、村上まつりでは参加者不足を考慮し、おしゃぎり曳き廻しは宵祭りには行わず、準備日と本祭り当日に行く。

大工町では、これまで雪洞の外側部分は毎年貼り替えていた。平成9（1997）年頃、価格も安く抑えられ耐久性の強い農業用の農営ビニールを知り、農協で購入し使用するようになった。近年では参加者が少ないために屋台を少数でも曳き廻せるよう、乾電池式のLED照明を取り入れ、重量のある自動車用バッテリーの搭載をやめ軽量化に成功した。

4-3 こまち ほうおんじ 小町 法音寺

小町の渡邊明（49歳）さんから作業場と倉庫のある法音寺で話を伺った。

法音寺は檀家を持たない寺であるが、かつては町内の抛り所となっており、江戸時代における町内の世帯を記した地図が残されている。宝永6（1709）年に火災で焼失した

ものの、宝永8（1711）年に町内の人達により再建された。小町のしるしは「都」と「小」の文字を併用している。江戸時代末期、小町には宮川屋という店が数多く存在した。宮川屋の「宮=みや」と小町の「小=こ」を繋げて「都=みやこ」としたが、これは当時の小町と宮川屋の繁栄を伝えている。

小町では雪洞に貼る和紙の接着剤に、水で溶かした木工用ボンドを使用する。以前は和紙を市内庄内町の齋藤蠟燭屋で購入していたが閉店したため、現在では国道沿いにあるホームセンターで特殊強化繊維の和紙をロールで購入し



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7

写真3-1. 平成25（2013）年の大工町七夕屋台巡行の様子

写真3-2. 平成27（2015）年の大工町七夕屋台巡行の様子

写真3-3. 大工町集会所

写真3-4. おしゃぎり収蔵庫

写真3-5～7. 抱雪洞、台雪洞、見送り雪洞

使用する。予算を確保してあるため雪洞の貼り替えは毎年可能であるが、人手不足のため貼り替えは数年おきに行なっている。小町の倉庫には明治時代初期頃と思われる扇雪洞があった。その頃は現在のような屋台の形状ではなく、伊勢堂に棒を通し担いでいたとされる。雪洞は5段重ねの装飾であったとされるが、電線敷設に伴い、青森などの他地域と同様に七夕屋台の装飾は小型化し、現在では3段重ねが主流となっている。

4-4 上町 古峯神社

上町の副区長をされている矢部英夫（71歳）さんから作業場である古峯神社の拝殿で話を伺った。

上町のおしゃぎりは現在、おしゃぎり会館^{注10}で常設展示され、古峯神社に隣接するおしゃぎり倉庫にはおしゃぎりが収蔵されていないため、現在ではここに七夕まつりの七夕屋台を収納する。上町では法被の色を昭和44（1969）年、紺色から橙色に変え、現在でも19町では目立つ存在



写真4-1. 平成29（2017）年の小町七夕屋台巡行の様子（晴天時）
 写真4-2. 平成29（2017）年の小町七夕屋台巡行の様子（雨天時）
 写真4-3. 法音寺（中央）とおしゃぎり収蔵庫（左）
 写真4-4. 素材として使用されている特殊和紙
 写真4-5. 水で薄めた木工用ボンド
 写真4-6. 組み立て前の雪洞
 写真4-7. かつて使用されていた雪洞の背景画と押絵

となっている。赤を多用した屋台の装飾に橙色の法被が調和し、快活な印象を受ける。正に橙色は他町との差別化を狙って生まれたブランドカラーと言える。近年になって上町では、村上大祭のおしゃぎり曳き廻しには大勢の参加者があるものの、七夕まつりへの参加者は減少し、七夕まつりの準備にあたる若者が少なく、予算も減少したため苦勞しているのが現状という。そのためか、大正時代の裏書きが残る抱雪洞の押絵が破損したものの修理ができず、その代わりに立体的な人形が飾られていた。また、経年の劣化や虫食いにより七夕屋台が破損したため、車台や車台最前方に設置された手木を新調した。その際、矢部さん親子が材料調達から制作までを担った。

4-5 鍛冶町 鍛冶町区民会館

鍛冶町の堀田治之（74歳）さんから十二社神社境内にあるしゃぎり土蔵と鍛冶町区民会館で話を伺った。

しゃぎり土蔵には雛子屋台と七夕屋台が保管されている。堀田さんの若い頃は毎年雪洞の紙の貼り替えを行っていた。雪洞に貼る紙は、生紙と呼ばれる和紙（大谷地和紙^{注11}）を購入し、紙の接着にはでんぶん糊を使用し、赤いインクを口で吹いて着色し制作した。七夕屋台上部に取り付ける花傘の修理は、市内久保多町の田中唐傘屋に依頼していた。昔の七夕まつりで使用した照明は、雪洞や提灯を蠟燭の明かりで灯したため、夜になると雪洞が燃えることもあったという。また、その頃は芯の太い和蠟燭を使用していたため、芯が燃え切らず残ってしまったと言う。鍛



写真5-1. 平成29（2017）年の上町七夕屋台巡行の様子（晴天時）
 写真5-2. 平成29（2017）年の上町七夕屋台巡行の様子（雨天時）
 写真5-3. おしゃぎり収蔵庫と古峯神社
 写真5-4～5. 和紙を剥がした状態の雪洞
 写真5-6. 押絵の裏側に記された制作年

治町区では火災を防ぐため中学生が芯を切る係を担当していた。現在の雪洞を見ると、特殊和紙やカッティングシートを素材として取り入れており、保存を前提とした素材の選定を検討していると考えられる。他地域の祭り同様、時代の流れで素材や制作方法が変化していることを感じた。また、区民会館に保管された押絵箱には、昭和62(1987)年に中村近惣氏によって制作され、現在も使用する押絵と共に、復原の手本となった過去の押絵も保存されていた。(写真6~7)古くなったものを捨てるのではなく丁寧に継承することが、この町内では今もなお世代を越えて行なわれている。

4-6 肴町 恵比寿會館

19町のうち羽黒町に次ぐ248世帯566人を擁する肴町の、肴町青年團の矢部智弘(31歳)さんと小川昂志(30歳)さんから恵比寿會館という公民館で話を伺った。

肴町区では毎年高校生が中心となって7月23日から8月10日の間、雪洞の貼り替え作業を行う。雪洞外面のデザインは、毎年変わる担当者に任せているため、図案が変わるとのことであった。紙や接着剤などの素材は、町内で近年まで営業していた小田福商店で購入していた。まつり

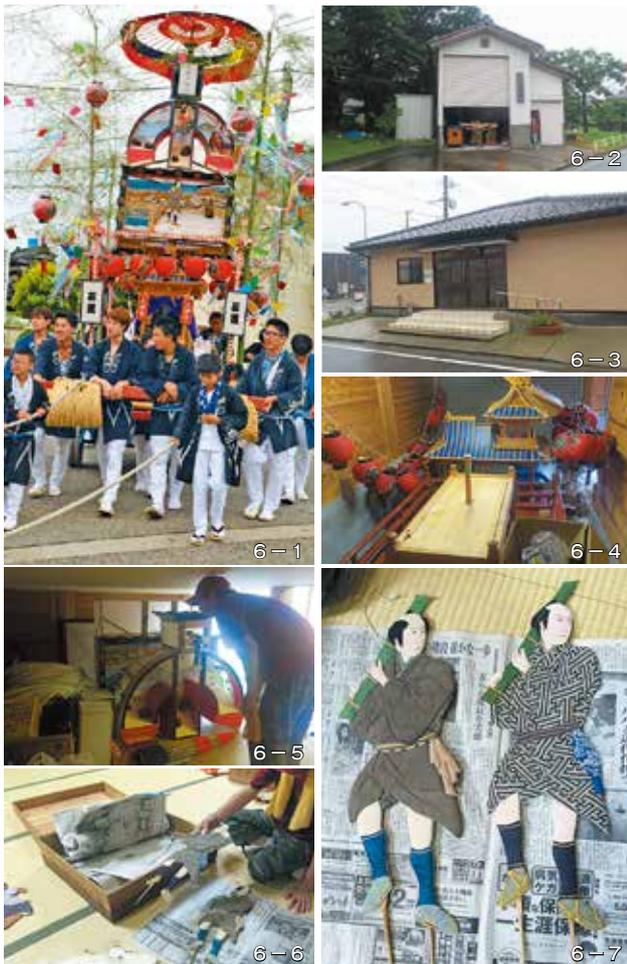


写真6-1. 平成29(2017)年の鍛冶町七夕屋台巡行の様子
 写真6-2. おしゃぎり七夕屋台の収蔵庫
 写真6-3. 鍛冶町公民館
 写真6-4~5. 収蔵庫内の様子
 写真6-6. 保管されている押絵
 写真6-7. かつての押絵(左)と復原された押絵(右)

などで購入するものは出来るだけその町内で購入する機会が多く、商店の閉店に伴い他町内でも素材の購入先を変更せざるを得なくなってきている。接着剤はでんぷん糊を使用する。着色は水性ペンキを使用するが、光の透過性がよくないため、照明を点灯した際は着色部分は光が透過せず、図柄が黒いシルエットとなる。照明具は現在ではLEDを使用するが、かつては豆電球、ハロゲン電球を使用していた時代もあった。雪洞の降雨対策として、透明ビニールで雪洞を覆い画鋏で固定する。七夕屋台は村上まつりで巡行するおしゃぎりよりも小規模の山車であるため、電線や電話線が整備されている大通りから脇道を巡行する機会がある。最近では電線や電話線の他に光ファイバーなどの通信ケーブルも増え、脇道の巡行には細心の注意を払っている。

4-7 長井町 秋葉神社

長井町の秋葉神社社殿と隣接された七夕屋台収蔵庫で尾崎進(45歳)さんと八幡真一(40歳)さんに話を伺った。

昭和47(1972)年に長井町で火災があり、七夕屋台と倉庫が焼失したため、再建されたのが現在の七夕屋台である。19町のおしゃぎり収蔵庫では、「おしゃぎり土蔵」と呼ばれ火災にも耐える土蔵造りの収蔵庫が多く、度重なる火災からもおしゃぎりを守り続けることが出来ている。長井町もおしゃぎり収蔵庫は土蔵造りであったものの、七夕屋台の倉庫は土蔵造りではなかったため、火災の被害に遭ったと思われる。屋台倉庫では雪洞を引き戸付きの棚に



写真7-1. 平成29(2017)年の肴町七夕屋台巡行の様子
 写真7-2. 恵比寿會館
 写真7-3. 見送り雪洞

一つずつ丁寧に収蔵する。長井町では毎年の貼り替えは実施せず、雪洞の修理を随時行なうため、このような保存や降雨に対する十分な対策のなされていることが判った。平成25(2013)年頃から表具師を生業とする八幡さんの発案で、用紙を和紙から建材で使用されている特殊和紙ワロンに変更した。また、透明のビニールで覆い画鋏で固定し、つなぎ目は透明テープで補強している。接着剤は木工用ボンドを使用し、着色はカースプレー(ストレートアクリル樹脂塗料)で作業している。雪洞の外側側面の装飾にはカラーカットシートを使用するが、カットシートは夜の照明では透けることがなく、シルエットになってしまうのが難点とのことだった。

4-8 ^{いづみまち} 泉町公民館・^{りっしょうだん} 立正團会館

泉町の泉町公民館と立正團会館で、中山陽介(35歳)さんに話を伺った。

平成3(1991)年に町内で大工を生業とする町民が結集し、七夕屋台を自力で全て新調した。市内を流れる三面川沿いに位置するこの町内には、上流の高根川沿いで伐採した木を三面川に流して運んでいたため、材木店や大工業を営む町民が多かったという。

近年では平成23(2011)年に雪洞の貼り替えを行い、平成28(2016)年に補修を行なった。内装店から麻の葉柄の強化和紙ワロンを購入し、素材として使用しているが、木枠にワロンを糊付けすると普通の和紙や障子紙よりも剥がす際に苦勞したため、糊付けはせずタッカーで固定している。雪洞内側に設置される画用紙に描かれた背景

画は、破損による劣化を防ぐためナイロン素材で裏から補強されている。雪洞外側面に装飾された文字やしるしは、ラミネート加工やワロンを着色した文字を貼るなどの工夫をするが、今後は建築用の防水テープも検討している。このように、建築用の資材や施工が施されているのは、中山さんが建築士を生業としているためである。

5. 電気線類の高さ

5-1 祭礼空間における電気線類などの架設について

他の地域同様に高さの制限によって、七夕まつりの七夕屋台の雪洞や高さも時代と共に変化してきた(2-2 村上の七夕屋台における雪洞の特徴)。村上まつり保存会の桑原猛氏によれば、村上市において通年7月上旬に開催される村上まつりでは、祭礼開催前に実行委員会は東北電力やNTTと連携し、19台のおしゃぎりが巡行するコースを中心に、およそ5.2m~5.3mの高さとなる各町のおしゃぎりが電気線類に引っかからないよう、祭礼経路における電気線類の高さに関する調整を行なっている。また開催当日は、おしゃぎりの二階天井部分に細心の注意を払うだけでなく「とんぼ」と呼ばれる道具^{注12}写真2-8を使用して電線等を持ち上げて通過させる。

8月中旬に開催される七夕まつりの屋台における取材時も、各町から電気線類における問題が伺える。おしゃぎりよ

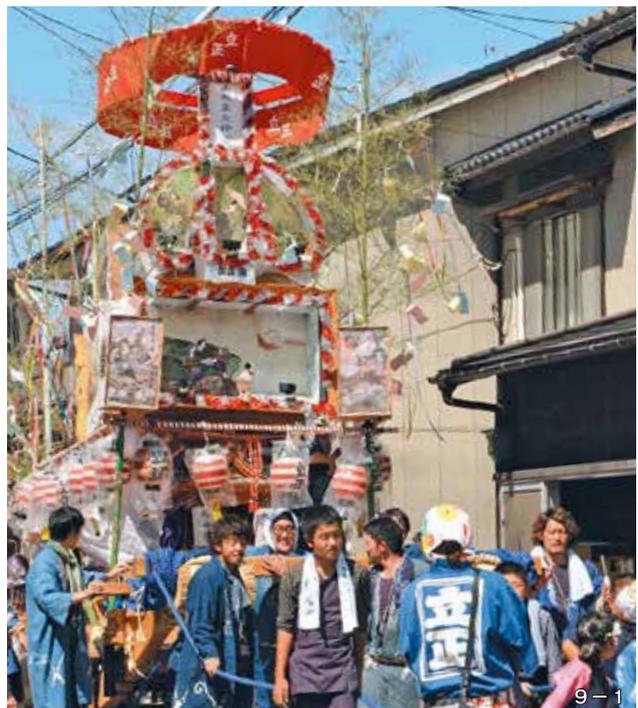


写真8-1. 平成29(2017)年の長井町七夕屋台巡行の様子
 写真8-2. 秋葉神社(中央)と七夕屋台収蔵庫(左)
 写真8-3~4. 箱に収められた雪洞
 写真8-5. 見送り雪洞
 写真8-6. 明かりが灯り、お囃子が聞こえる夜の秋葉神社

写真9-1. 平成29(2017)年の泉町七夕屋台巡行の様子
 写真9-2. 泉町公民館
 写真9-3. 立正團会館

りも高さが低い七夕屋台の巡行は、整備されたおしゃぎりの巡行経路だけでなく、細い脇道にも入ることが多い。最近では電線や電話線に加えて、光ファイバーなどのデジタル回線ケーブルも増えているため、最上部の御幣や花笠が電線等に引っかかるような場所もあり、注意を払い巡行している。なお、電線の高さは以下のように定められている。

5-2 高さの基準

経済産業省「電気設備の技術基準の解釈」(20130215 商局第4号)第68条 低圧架空電線の高さ(省令第25条)は、平成25年3月14日に制定された。基準は以下の通りである。

第68条 低圧架空電線又は高圧架空電線の高さは、次の各号によること。(省令第25条第1項関連)

- 一. 道路 { 農道その他の交通のはげしくない道路及び横断歩道橋(道路、鉄道、軌道等の上を横断して施設される橋状の工作物であって、歩行の用にのみ供されるものをいう。以下同じ。)を除く。以下同じ。} を横断する場合は、地表上6m以上。
- 二. 鉄道又は軌道を横断する場合は、レール面上5.5m以上。
- 三. 横断歩道橋の上に施設する場合は、低圧架空電線にあつてはその路面上3m以上、高圧架空電線にあつてはその路面上3.5m以上。
- 四. 前三号以外の場合は、地表上5m以上。ただし、低圧架空電線を道路以外の箇所に施設する場合又は絶縁電線若しくはケーブルを使用した対地電圧が150V以下の低圧架空電線であつて屋外照明の用に供するものを交通に支障のないように施設する場合は、地表上4mまでに減ずることができる。

6. 問題点

現地調査対応者の年齢は30代から70代までの幅広い年齢層となり、材料や素材の話に留まらず雪洞の制作からかつての七夕まつりの話、各町が抱える課題にまで広がった。各町の七夕屋台の組み立て作業には、各町内の職人の技が活かされていることも判った。七夕屋台巡行における雪洞の破損は少ないものの、七夕屋台の組み立てで雪洞を持つ際、雪洞に貼られた紙を持ち手の指で破ることが多いという。また、七夕まつりの期間中に作業場所で画鋏を踏んだ経験のある人も多く、このように制作作業においてよくある話が各町に共通してあることも判った。

加えて、雪洞の内容や題名は先輩から語り継がれていたが、現在では自町の雪洞の題材を知らない若者も多く、雪洞の制作だけでなく雪洞の意味や押絵の修復まで、語り継いでいく必要性を感じた。

いずれの地域における現地取材^{参考5}でも明らかだが、時代の変化によって材料の調達や修理は慣習だけでは対応しきれない事態が生じている。その一つ一つの課題に対応し解決することが、祭りの文化継承には必要といえる。

雪洞で使用される押絵も大変貴重で魅力的な装飾であった。他地域の祭り灯籠を調査する限り、村上のような装飾は見受けられない。村上の各町では木の押絵箱があり、上町では押絵に大正時代の裏書きがあるように(写真5-6)、代々受け継がれている押絵が保存されるものの、押

絵の修理をする職人や、修理の出来る器用な人材が町内からいなくなり、困惑していることも判明した。現在では、長野県松本市の松本押絵雛が江戸時代から続く押絵として挙げられる。松本押絵雛の伝承を目的とした店舗を松本市で構え、松本押絵雛研究会を立ち上げているベラミ人形店の三村隆彦氏によれば、各地から押絵修理の個人依頼は多く寄せられ、早急の対応は難しいという。今回は紙と絵具で作られた灯籠の制作・素材に関する造形的研究を中心に研究を進めてきたが、今後は押絵についても研究を進める価値があると考えている。

関連する根本的な問題として挙げられたのは、制作過程も「祭礼」の一部であり心を込めて丁寧に制作・修理を行なうといった、「祭礼に参加している意識」が若い世代には薄れ、イベント的な軽い気持ちで参加している印象があるとの意見もあった。村上の七夕まつりは祭礼である。時代の流れと共に祭りにも変化があるものの、成り立ちや祭りの意味を忘れずに、伝統の継承と進化を村上の若い世代に期待したい。一方で、世代間の縦の繋がりや大人とのコミュニケーションを苦手とする若者も多く、自らの考えを伝えられる環境整備と若い世代とのコミュニケーションのやり方の検討を上世代に期待したい。

7. おわりに

本研究は、グラフィックデザイナーでもある筆者が、地域に貢献できることは何かを考え、平成26(2014)年から長岡造形大学特別研究の一環として行なったものである。その1では地域の伝統的な祭りで使用され内部に照明を灯す灯籠の制作・保存・修復に活かすため、紙・絵具・骨組・光源といった素材に着目し、多様化した祭り灯籠の装飾における現状を、造形的な観点から比較研究を行なった。その2では青森県五所川原市、青森県青森市、秋田県能代市、富山県南砺市、石川県珠洲市、愛知県刈谷市、宮崎県都城市において、素材や制作について制作担当者に制作現場で現地調査を行った。その3では村上市の七夕まつりにおける七夕屋台の雪洞について、その2同様に現地調査とアンケートの報告を行なった。

ビニールを掛けず降雨に強い祭り灯籠を作るにはどうしたらよいかという疑問が本研究の出発点となったが、本研究その1からその3によって、各地域では従来の素材や制作方法を研究し新しい素材を取り入れ制作に役立てていること、祭り灯籠の保存は丁寧に修復・収蔵し継続して使用する地域がある一方で裨ぎや祓いの観点から1回毎に祭り灯籠を解体して破棄したり燃やすことで人々の厄を祓う意味を持たせる地域もあること、電気線類の敷設による灯籠の大きさの変化が各地域であったこと、伝統を継承する考え方は、伝統を忠実に継承する制作者と伝統を進化させながら継承する制作者がいたことが判った。

結論として、必ずしも丈夫な灯籠を良しとするとは限らないことに辿り着いた。人口減少と低予算の中での祭り実施の難しさを痛感したものの、本研究が伝統的な祭りを愛する地域の祭り灯籠制作担当者たちに届き、制作・修復・収蔵に役立つことを願っている。

謝辞

村上まつり保存会、村上まつり保存会会長 加藤悦郎さんを始めに各町内の区長さんや評議員の皆様には、アンケートや現地調査を快く承諾して頂いた。また、村上市消防本部には村上市における降水量等のデータを提供して頂き、村上市役所には、大工町区の世帯数と人口をご提供頂いた。なお、平成26(2014)年に実施したアンケートの際、4町内(久保多町、小国町、庄内町、上片町)から現地調査の許可を頂いたものの実現することが出来なかったことをお詫び致します。この他にも村上市郷土資料館 学芸専門員 桑原猛氏、長岡造形大学 造形学部 建築・環境デザイン学科 平山育男教授、長岡造形大学 前研究員 矢尾板和宣氏には協力を仰いだ。力量不足の私に対して、以上の力添えがあったからこそ、4年間研究を継続することができた。紙面を借りて感謝申し上げます。

注釈

- 参考1：村上市：村上市史 民俗編 下巻，村上市，p.p454～456，1990
参考2：村上市教育委員会：村上まつりのしゃぎり行事総合調査報告書，p.p22～23，p.p394～402，2016.3
参考3：牟田高惇：随筆百花苑 13巻 地誌編 諸国廻歴日録，中央公論社，p.p286～300，p.p418～423，1979.11
参考4：三好不二雄：随筆百花苑付録第1号，中央公論社，p.p3～4，1979.11
参考5：永井義男：剣術修行の旅日記～佐賀藩・葉隠武士の「諸国廻歴日録」を読む，朝日選書，2013.8
参考6：桑原猛（村上市郷土資料館 学芸専門員）：村上の七夕祭り（資料），2009.1
参考7：吉川賢一郎：地域の伝統的な祭りにおける紙と絵具で作られた灯籠の制作・素材に関する造形的研究 その2，2016.4

参考 URL

- U1：気象庁過去の気象データ検索 <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> (2017.10 閲覧)
U2：電気設備の技術基準の解釈について
http://www.meti.go.jp/policy/safety_security/industrial_safety/sangyo/electric/detail/setsubi.html (2017.10 閲覧)
U3：広報さんじょう <http://www.city.sanjo.niigata.jp/common/000038283.pdf> (2017.10 閲覧)
U4：トンボ(道具) - Wikipedia [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%B3%E3%83%9C_\(%E9%81%93%E5%85%B7\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%B3%E3%83%9C_(%E9%81%93%E5%85%B7)) (2017.10 閲覧)

注記

- 注1：現在村上市で7月6日、7日に開催される祭礼を告知する際の名称は、昭和41(1966)年の告知ポスターから「村上大祭」が使用されているが、本研究においては、昭和63(1988)年に新潟県無形民俗文化財に指定された際の名称である「村上まつり」に統一して使用する。また、「七夕まつり」の名称においては、「七夕祭り」「七夕祭」といった表記も見受けられるが、本研究における名称は「七夕まつり」に統一して使用する。
注2：(参考2)では各町を「町内」と表記しているが、本研究においては、「町=町を表す単位」と「町内=その町の中」を使い分けて使用する。
注3：諸国廻歴日録は、佐賀藩士牟田文之助高惇が、嘉永6(1853)年8月7日、剣術修行のため二ヶ年の関東諸国其外の廻歴の藩命をうけて修行廻国した時の日録である。牟田文之助高惇は、佐賀藩士鉄人流師範役吉村市郎右衛門惟章の次男として天保元(1830)年11月24日に生まれた。幼時から牟田家に養子となり、天保7(1836)年牟田家の家督を仰せつかる。実父の鍊磨をうけるのはもちろん、同じ鉄人流師範内田庄右衛門に師事、嘉永5(1852)年6月には吉村市郎右衛門から二刀流秘伝の巻を与えられ、内田庄右衛門からも一流の位残らず一手相伝を受けた。鉄人流とは青木城右衛門金家が、宮本武蔵から受けた二刀流剣法で、城右衛門が後年鉄人と号したため、天下無双鉄人実手流と号したものである。その門下に青木興四郎家久と内田庄右衛門良興の二豪があり、青木の系統は越後村上藩に仕え、鉄人流を時中流と改めて代々その技を伝える。牟田文之助が村上に赴き時中流の免許を得る所以である。内田は元来が佐賀の人であったので、鉄人流を佐賀に伝えた。
注4：越後村上藩には、安政元(1854)年6月26日に到着し7月1日まで小町の旅籠屋井筒屋善蔵に宿泊するが、旅籠で多数集まり流儀の話などされては困るとの指摘が村上藩重役たちからあり、堀之脇の空屋敷に移るよう打診され、7月20日まで滞在したという。(参考3)(参考5)
注5：七夕屋台の後方、伊勢堂上部に設置された台雪洞。
注6：歌舞伎や講談で脚色された佐賀鍋島藩のお家騒動の話。
注7：村上のおしゃぎりの収蔵庫には、「しゃぎり小屋」「おしゃぎり土蔵」など様々な呼称がある。また、「保管庫」との呼称も聞かれたが、他からものを預かる意味があるため、本研究では保管庫ではなく収蔵庫と統一した。
注8：紺惣染物店、七代目紺屋惣兵衛。幼名は熊蔵。平成6(1994)年に死去。享年91歳。染物業を営み、冬から春にかけての閑散期には、依頼された雪洞の絵や押絵、仏画などを手掛け、浄土宗総本山知恩院(京都市)にも仏画を納めている。大町以外では、鍛冶町、肴町、泉町の押絵も制作している。
注9：村上市役所調べによると、七夕まつり参加復活をした昭和55(1980)年の世帯数と人口は33世帯113人、平成元(1989)年29世帯78人、平成11年(1999)年23世帯81人、平成21年(2009)年21世帯61人、平成29(2017)年10月現在、19世帯46人となっており、この38年間で大幅に減少していることが判った。おしゃぎりを巡行する19町のうち最も世帯数と人口の多いのは、羽黒町で240世帯600人となっている。
注10：村上市郷土資料館(通称：おしゃぎり会館)は昭和57(1982)年に開館した。開館当初は、大工町、塩町、小国町、肴町のおしゃぎりが常設展示され、平成29(2017)年10月現在では、大町、大工町、上町のおしゃぎりが常設展示されている。
注11：三条市下田地区大谷地で生産されていた大谷地和紙は、江戸時代に村松藩の御用紙として使われた由緒ある和紙で、300年以上の歴史を持つ唐傘などにも使われていた良質で堅牢な和紙の産地だった。昭和30(1955)年代に途絶えてしまった大谷地和紙を平成21(2009)年に地元住民らによって復活し、現在も大谷地和紙保存会で生産を続けている。
注12：運動場などに使用するT字型の整地用具「トンボ」と同じ形状をしている。昆虫のトンボの全身に似ていることからこの名で呼ばれる。(文字の表記は、かなとカタカナが混在している)

撮影

吉川賢一郎、吉川周作、三須友也(1-2～3、3-1～2)

協力

村上市役所、村上市消防本部、村上まつり保存会、村上まつり保存会会長 加藤悦郎、大町区(渡部不二人、横澤信夫)、大工町区(高橋則敏)、小町区(渡邊明)、上町区(矢部英夫)、鍛冶町区(堀田治之)、肴町区(矢部智弘、小川昂志)、長井町区(尾崎進、八幡真一、高橋一隆)、泉町区(中山陽介)、ベラミ人形店(三村隆彦)、三須友也、吉川周作、村上市郷土資料館 学芸専門員 桑原猛、長岡造形大学附属図書館、長岡造形大学学務課、長岡造形大学 平山育男教授、長岡造形大学 前研究員 矢尾板和宣(以上項目順) ※文中で表記した取材対応者の年齢は平成29(2017)年11月現在のものです